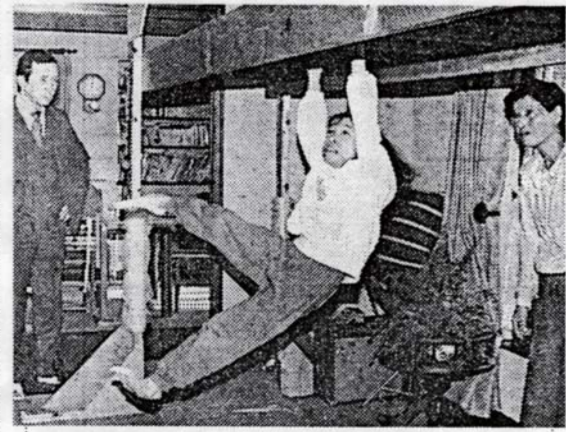


京の脳性マヒ女児 ラブちゃん



雲梯も自由にこなせるようになった菜歩ちゃんと両親の直樹さん、レイ子さん(京都市西京区の自宅で)

座っていてもすぐに後ろに倒れてしまっていた中脳障害の京都の小学生が、米国のドーマン博士の治療法に取り組んで二年七月。一日十数時間の両親や兄姉、ボランティアなどの訓練で、言葉、座り、歩き方もすっかり、雲梯(うんてい)にも自由にぶら下がるようになった。原稿用紙七枚もの自由研究「歌舞伎について」もまとめている。わが子の姿に、脳障害は不治ではないんだ——と確信を強めた両親は「このほび、同じ障害に悩む方の励みになれば」と、闘病トーク「奇跡のラブちゃん」(彩古書房、千三百円)を出版した。

歩けたヨ 作文だって 出版記

ドーマン法で2年7ヵ月

この小学生は京都市西京区下津林佃の小西菜歩(らぶ)ちゃん(小)五十三一年一月に会社役員直樹さん(中)とレイ子さん(小)の二女として生まれた。二週間後に食道閉鎖の手術を受けた後、呼吸補助器にたんが詰まり約五分間心臓が停止、中脳障害になってしまった。

両親は「大きな手術をしているので成長の遅れることがある」との医師の言葉を信じて、三歳になってもお座りができない菜歩ちゃんでも、目の動きながら知能の遅れはないと考えていた。

しかし、菜歩ちゃんは小学校に上がってもちゃんと歩かず、京都市内の病院に訓練に通いながらも年々症状は悪くなるばかり。直樹さんとレイ子さんは「脳性マヒには回復の道はないのか」といろいろたしをしのがせていた。

規則正しく腹ばい 写真見て記憶反復 家族ら支え 着々と回復

奇跡のラブちゃん 脳性マヒから回復の過程



両親の手で発行された闘病記「奇跡のラブちゃん」

の障害でなく、思考を表現したり体を動かしたりする時に使う中脳の障害だと教えられた。ドーマン法は脳障害の回復のための強力リハビリプログラムで構成されている。直樹さんは、さっそく米国での直接訓練の申し込みをすると同時に、一刻も早く菜歩ちゃんを治したいと、一昨年三月には親のための集中講座受講のために渡米、翌月から家族会議を開いて、明るく本格的な、菜歩ちゃん治療作戦をスタートさせた。

食卓テーブルは菜歩ちゃんに規則正しい呼吸をさせるための訓練台に、応接間は雲梯を持ち込んでそのままリハビリルームに変身した。朝六時から夜十時、七、八時まで菜歩ちゃんの遅れた運動機能を回復させる訓練が何度も繰り返された。

規則正しい腹ばいの繰り返し。写真を見せる記憶反復訓練。兄の哲哉さん(小)と東山野交三年、市のあゆみで、